

図書寮蔵紅葉山御文庫本目録(二)

史部

白井和樹

一 序

前稿に引続き、書陵部所蔵の旧紅葉山御文庫本(以下「御文庫本」)の目録を作成した。今回は史部を扱う。御文庫本の判定基準は前稿同様である。

二 史部図書

1 概要

今回史部図書として認定・著録したのは凡て一〇七部一八九九点(現存一六六部一八七八点)。うち『御書籍来歴志』(以下『来歴志』)所載本は三九部八六六点(現存三八部八四五点)①。

史部図書は、『来歴志』所載図書の大半が宋元版と明官版ながら、そのほとんどが「貴重書」ではない(準貴重書)。明清の写本が多く、いずれも江戸後期の収録とみられること(佐伯毛利本含む)は重要な点だと考える。

加えて、明版を中心とした地図・地誌(地方志)類にも貴重なものが多く

——とはいえ明治の移管の関係で内閣文庫本とコレクションとしては二分された、その片割れなのだが——、当部所蔵の他の漢籍群(山内本・徳山毛利本など)と合せて一大地誌コレクションと言つてよい。

2 図書点描

① 『故唐律疏義序文』

函架番号402-12 : (A)

『故唐律疏義釈文訂正』

函架番号402-13 : (B)

『故唐律疏義』

函架番号402-15 : (C)

『故唐律疏義』

函架番号402-17 : (D)

(参考) 『故唐律疏義』

内閣文庫蔵本

請求番号史100-2 : (E)

(A)は和装・大本・一冊、清〔雍正十三年〕写。(B)は和装・大本・一冊、享保十五年〔沈炳^{しんべい}〕編・写。(C)は和装・大本・一五冊、江戸中期写。(D)は和装・大本・一六冊、享保十二年写。これら是一群の書物である。②。

ことの起こりは(C)の一五冊の写本の献上だった。当時御文庫には『唐律疏義』がなかったらしい——『御書物方日記』(以下『日記』)享保十年(一七二五)二月十七日条に有馬氏倫から『長秋記』『唐律疏義』の有無につき奉行

に問合せがあり、ない旨返答している。その後(C)を享保年間に松平忠周^③が献上し、荻生茂卿(徂徠)が考定したという(『來歴志』『御書目録』(〇後)述)。その後享保十年荻生 観(北溪)が命を受け、諸書を博搜して『唐律疏義』を校訂・繕書し、さらに五年後長崎に送られ、清人沈燮庵(沈炳)にも校訂させ、清の刑部尚書勅廷義が序を書いたとされる。^④

実は、序は勅廷義の筆ではない——序末の雍正乙卯(十三年)仲夏の日付だが、すでに勅尚書はこの世にない。以前「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」(<http://toshiryokunaiichigo.jp/>)の「ギャラリー」で本書を採上げ解説したが、死去のことまでは念頭になく、誤った。^⑤ここに訂正する。

さてこれらの図書に関して重要なのは、(A)(B)の表々紙の「共十八冊」の朱書である。何と「共十八冊」なのか。その答えは内閣文庫所蔵の(E)である。実見すれば、(A)(B)と同じ位置に「共十八冊」との朱書がある。また(D)と(E)は瓜二つであるが、違いは『史一百』/天とのハリ紙が(D)にあることで、このハリ紙により宮内省(図書寮)に移管されるべき(E)が誤って内閣記録局に戻され、代りに(C)が来たのである(無論、(C)にも大変な価値がある。念のため)。それゆえ泣別れになってしまった。

ところでこれら諸書につき、『日記』寛保四年(一七四四)正月二十六日条に「十六冊(一筥、)」「外二 荻生物七訂正一冊/書付一通」とあり「二之九十番」の箱に入っていたらしく(明和頃「二之」八十五番^{〇御書目録})、また同二月十七日条には、

一、左之通、新規御預二候由和泉守殿被仰渡候、

唐律疏義序墨付八枚、

右、清朝刑部尚書勅廷儀撰、

同序釈文 一冊 (〇御書目録曰、「元文元年沈燮庵所蔵刑部尚書勅廷儀序一冊并訓点釈文一冊附」釈文訂正一冊別記セラル) 右、一箱二入、此度御書物方江御預二成候間、唐律疏義二相添可差置候、

子二月右筥、角之所損シ繕候処有之、
^{〇大日本近世史料}

とあり、当時から勅廷儀序などが本編と一緒に保管されていたことが分かる。なお、元版『故唐律疏義』(函架番号402-14)は佐伯藩主毛利高翰の献上で、今まで述べてきた一群とは無関係。

② 『安慶府志』

函架番号402-65

線装・縦長本・八冊。明嘉靖二年李遜等撰、嘉靖年間刊。本書は、前田綱紀が徳川吉宗に献上し、吉宗が地方志蒐集に乗出してゆく契機となった書物である。このこと自体はすでに大庭脩氏が詳述されるが、氏が『松雲公林家往復書簡』(金沢市立図書館蔵)を調べたところによると、享保六年ころから地方志(地誌)に関して林信篤と前田綱紀との間でやりとりがなされ、享保六年六月ころ吉宗が地方志に興味を持つて信篤から綱紀に伝わり、綱紀が自分の蔵書からの献上を申し出、林家の方でも御文庫本の地方志に何があるか調査した上で受入れを回答、同年十一月十七日に献上し、翌年四月九日に御文庫に御預けとなったという。なるほど尊経閣文庫蔵『林家往復書翰』^⑩を閲読すれば、たしかに県志を中心とした地方志へ言及した書状が何通もあり、また同時期、おそらく吉宗自身が見るために、『杭州府志』(函架番号402-79)を借出した記録がある(『日記』享保七年三月九日条)。

なお、綱紀のこの時の他の献書は現在内閣文庫に存するようである。

また、「閩中蔣玠」「三径蔵書」の両印は清初の蔵書家蔣玠のものとして、

アメリカ議会図書館所蔵『逸民伝』(明版)にも捺される。

③ 『大明会典』

函架番号402・96

和装・大本・七〇冊^①。明徐溥等奉勅撰、明李東陽等修訂、明申時行等増修。明朝の諸法令を集大成した総合行政法典で、当部蔵本は万暦年間に増修された所謂「万暦会典」である。

本書は、合冊された時期が分かる点が貴重な図書で、『日記』の記事を追うと、まず延享二年四月二日条に次のような記述が見える。

一、先達而御修覆之節、大明会典式百四十冊ヲ七拾冊ニ合冊申付候所、其以後御小納戸御目録并役所御目録共冊付ケ直リ不申候ニ付、今日役所御目録、七十冊ニ認直シ、都合八冊一箱 御殿江持参之、則御小納戸目録八冊引替之、西御蔵江入置申候、右ニ付、来五日又四郎儀罷出候様ニと申渡候、
○大日本
近世史料

合冊は、現在の一冊の中で、小口の色が途中で変わっているものがあることなどに痕跡がある。補写についても時期を同じうするかもしれないが、わざわざ専用の罫紙（但、紙が全く異なる）を用意し書写するなど用意周到で、今後検討せらるべきだろう。

先の記事をふまえると、当該『大明会典』につき延享二年以前は二四〇冊本をあたればよいということになる。例えば享保七年十月二十六日条には、

十二月廿七日下午、
二ノ七十九番

大明会典 桜田御本、唐本、
玉子色少黒ミ有之
表袴、白糸トジ、
外題無シ、

二百四十冊

挟箱ニ入差上ル、棒ハ不添、
○大日本
近世史料

とあり、書物の特徴——合冊のため現在の装丁は留めないが——を記述するとともに「桜田御本」だという。すなわち徳川家宣の旧蔵書（所謂「桜田

御文庫本」だと判明し、二重に面白い。ちなみにこの「外題無シ」というのはやや不親切な書きぶりであり、実際は「外題ナシ、一冊計ニ打付書外題」という（『日記』享保十七年閏五月二十七日条）。すなわち一冊だけ打付外題で、他冊には外題がなかったのだ。

ところで元文五年（一七四〇）七月四日条には、同じ二四〇冊の唐本ながら「二之七十八」の「唐表紙・白糸・赤紙板外題・箱春慶塗／大算筒」という『大明会典』が登場する——これは同じ本ならんか。享保七年までの御文庫の漢籍目録たる『御文庫目録』に見える冊数不記本は遅くとも享保元年までの収書たる四一冊本（『官庫書籍目録』）——すなわち『元治目録』にいう『重校明会典』——に相当すると見るのが穏当であり、その後元文五年までに新たな二四〇冊本の収儲はないから（『日記』）、この二四〇冊本とは桜田御本と思しい。よって当二四〇冊本につき、一冊のみの外題では心許なく（というのも数冊のみ借出しの例もあった）、新たな外題を赤い紙に刷って貼つたとみるべきだろう。なお「二之七十九」の箱には、外題が変わった頃を境に『大清会典』が入れられたらしく（『日記』元文二年九月三日条に「二之七十九」は『大清会典』となっている）、代って「二之七十八」に四一冊本と同居している（『日記』享保十八年四月廿七日条など）。これは『御書目録』でも同様。

さて現状では、外題は赤紙に非ず白紙の刷題簽で（同じ版木を用いた可能性も）、表紙は浅葱色巾繫文型押——例えば『樊川文集夾註』（函架番号511-44）などと同じ——である。『樊川文集夾註』も化粧断ちなど改装せられた痕があり、同書も『大明会典』現装の完成の時期特定の一助になるかもしれない。

④ 『皇明実録』

函架番号453-4

線装・半紙本大・四〇〇冊^②。明歴朝史官編修、清初写、〔柴野邦彦〕校訂。

本書は輸入時期が特定できる点が特筆に値する。これもすでに大庭氏が詳述される。

大庭氏はまず『辰壹番唐船持渡商売書目録并大意書』（天理図書館所蔵）の史料的分析を行い、この「辰年」が宝暦十年（一七六〇）だと突止められ、次いで『日記』の記事から、宝暦十年新渡の書物のうち、江戸表の御用となつたのが当該『皇明実録』と『古今図書集成』の二部だったことを明らかにされた。さらに、三田村泰助氏らの研究を参考に、本邦伝来の『明実録』諸本のうち、御文庫本が三部あり、佐伯毛利本を除いた二部のどちらがこのときの新渡書か冊数・内容等に鑑み、当該書と判定せられたというわけである。さて三田村氏によれば、本書は、太祖より武宗に至る部分の本文が現存諸写本中優れているという¹³。

本書が新規御預けになる際は二箱だったが（『日記』宝暦十四年正月十九日条）、現在は三箱に収まる（それでも各書匣はかなり大きい）。

なお、目録上寛政の三博士のひとり柴野栗山（邦彦、一七三六～一八〇七）の校訂が入っているとされるが、この点については、本書が『来歴志』所載本でないという疑いがあることに関係し、再検討を要する¹⁴。

⑤ 『宣大・山西三鎮図説』 函架番号455-3

折帖・特大横本・三帖¹⁵。明万曆三十一年写。宣府・大同・山西の三鎮等の様子を記録したもの。絹本着色の絵図と、同じく絹本に墨書した本文とで構成される。旧題を「聖蹟図」といい（『来歴志』）、たしかに外題には「九邊聖蹟圖 天（地・人）」と記される。『御文庫目録』では、「天下九辺聖蹟図」として寛永十六年以前収儲分に見え（員数不記）、『官庫書籍目録』でも同名で「三帖」だと記される。

本書について、明和七年（一七七〇）に修復願いが出されている。「数年大破仕候得共」予算の都合で見合せていたのだという（『日記』同年閏六月二十五日条）。これを受けた同二十七日の記述によると、「右は御蔵に有之候、古御目録并日記等を以吟味仕候処、享保年中より以前御蔵江相納候品御座候半と奉存候得共、年月等相知不申候、」と上申しているが、「古目録」とあるからには、おそらく延宝目録あたりを見ての記述と思しい。

⑥ 『帝鑑図説』 函架番号500-64

折帖・特大本・二帖¹⁶。明万曆年間刊。張居正が、神宗（万曆帝）の帝王学の教科書として、古の君王たちの事蹟を図と文にまとめたもの。

これまで（特に日本では）慶長の所謂「秀頼版」（古活字版の一種。例えば図書寮本では函架番号56-34（六冊、御所本）がそれに相当する）に注目が集まっております、この特大本にはなかなか光があたってこなかったようである（板倉聖哲氏御教示）。秀頼版は明版坊刻本に近いものと考えられる¹⁷。

さて当該『帝鑑図説』については、さいきん林麗江氏により詳細に検討されており、¹⁸ (1)当該版本は、日本で言われているような万曆官版とはみなされぬこと（潘允端刻本と称呼）、(2)潘本はその図など形態的特徴から、神宗への奉呈本（写本であり、卷子装と推定）に非常に近いと考えられること、(3)潘本は序を書く王宗沐と、編者張居正との親しい関係から、張から王に模本（王序にいう「原本」）が贈られ、それをもとに潘が刻本を作った可能性があることなどが指摘されている。

なお、該本は寛文十一年（一六七二）収儲と考えられる（『御文庫目録』¹⁹）。ちなみに『日記』には「御覽帝鑑図」として見え、「絹浅黄表紙／大本二帖」と注記されている（享保七年七月七日条）。現在は表紙を掛け直しているらし

く、縹色の紙の表紙である。

ところで驚くべきは入っている塗箱である。法量の詳細は注(16)を参照されたいが、縦横は本冊よりひと回り大きいのに高さはやや不足し、おまけに「帝鑑圖説 六冊」と墨書せられる。六冊本というと『元治目録』では古活字版(秀頼版か)があるだけだが、これは類本から推すれば大本大ゆえ、その箱には似つかわしくない。一方『采歴志』には別に六冊本が見え、「東照大君御前ノ書」で写本だという。『采歴志』の初編(享和・文化頃、『新訂御書籍目録』に附属)より天保(『重訂目録』に附属)の間に佚失したのだろうが、おそらくはこの六冊の写本の箱が転用せられたと考えてよからう。

また、蔵書印も興味深い。注(16)に示した宮内省以外のA-E印のうち、A B Dの組合せで東京国立博物館所蔵『陽明先生要書』(明崇禎八序刊)と、A Dの組合せで国家図書館^{○台}所蔵『吾学編』(明隆慶元刊)と、Eは当部蔵本中『論存』(函架番号403・54、御文庫本、明版)・『馬経全書』(同404・21、同)とそれぞれ共通する。

⑦ 『康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写』 函架番号E119

卷子装・特大・一卷²⁰。清の聖祖(康熙帝)が琉球国中山王尚貞に宛てた勅諭の江戸前期の精巧な写である。康熙二十八年(一六八九)元禄二年(十月十日付)、『官庫書籍目録』では「当申五月六日御小納戸ヨリ参候御書物目録」の項目に「康熙皇帝詔書写 一箱」として見える。吉宗が代始(但、まだ將軍宣下前)に見ている書物のひとつ(『日記』正徳六年六月十日条)。前半は漢文、後半は満洲文字で書かれる。^(補注)

琉球から清朝への朝貢に対する返書であり、その質からみて、薩摩藩の関与での作製・献上と考えるべきだろう。現在は改装せられている。

なお、もと本書が入っていた筒と外箱(ともに木製)が遺される。本書が改装せられた関係で(太巻きになった)、外箱のみ今も使われている。筒は別置せられているが、保存状態が思わしくなく、閲覧には堪えないと思う。現状を写真等で記録し、損壊せぬよう対策を講じる必要がある。その姿の概略を記述しておく、下地を塗った上に金で二匹の龍を描く、直径7・5、全長80・7の筒である(全体が五つの部分に分かれるようだ)。

⑧ 『混一歴代国都疆理図』 函架番号E4-7

絹本着色・一幅²¹。明嘉靖五年(一五二六)に作製された「楊子器図」と通称される地図に朝鮮を詳細に加えたもの。

同系の図像が、妙心寺麟祥院、彰考館文庫、京都大学文学部地理学教室、高麗大学校仁村記念館、遼寧省旅順博物館、ソウル大学校奎章閣にあることが知られる。²²

井上充幸氏は、麟祥院が春日局ゆかりの寺であり、楊子器図が家光の寄進であること、旧宮内省が幕府蔵書を引継いでいること(但、楊子器図が御文庫本であることを認識しているかは不明)、彰考館が水戸徳川家の文庫であることから、三つの楊子器図が一六世紀後半以降にもたらされ、徳川家で所有されたことに徳川の権威の象徴を示しているとみる。²³

彰考館本については、筆者はその伝来につき聊かも知るところがないので陳べるところはないが、川瀬一馬「駿河御讓本の研究」(『日本書誌学の研究』)所載の文政頃の「水戸家所伝現存駿河御讓本書目」にも楊子器図らしきものは見当たらず。確言こそできないけれども、水戸家は独自に楊子器図を求め得たと解すべきか(また青山氏がすでに述べるとおり、彰考館本は朝鮮図が詳しくない、原図により近い系統のものであり、伝来等につき麟祥院本や御文庫本と同

様に扱ってよいか、やや検討を要するとも思う。

そうなると、本図がいつから御文庫に伝来したのが重要な問題だ。『官
庫書籍目録』『官府書目』『御文庫目録』にも見えぬ——『御文庫目録』に見
えないとは当然、長崎から入ったものではない、または享保七年以前には入
っていないことを示す。そして『日記』では享保元年十一月十六日条が初見、
同九年五月二十八日条には「大明絵図 掛物一幅 一箱」とある（目録上の
初見は『御書目録』の「大明図 一幅」（第六冊、四の）四十四番（地理部のう
ち）本目録で特に注記もなく、誰が献じたとか、いずれの御小納戸から移管され
たとかは一切分からぬ）。『日記』正徳三年八月六日条の「大唐絵図」との関係
も未詳。

しかし、朝鮮と関わり深い地図だとすれば、最も蓋然性の高い収儲経緯は
対馬宗氏の献上だろうか。それも定かではない。中国経由・日本での複製な
ど考えられる可能性は多い。

徳川将軍家に最初に入ったのは麟祥院本であり、家光の寄進で将軍家より
出、水戸家へは別に入ったとすると、三つの楊子器図が（同時ではないにせ
よ）徳川家で所有されたことに意義を見出すのはやや難しいようにも考えら
れるが、（水戸家は別として）徳川将軍家に複数回入ってきている事象自体の
面白みはあるいはあるかもしれない。

三 紅葉山御文庫の目録二種追補——各論（1）の続

前稿より一年の間に、御文庫の目録と思しきものをふたつ見出したので、
紹介を兼ねて小文を草す。

まずひとつ目は、国立国会図書館所蔵『官府書目』である。和装・大本・
一冊²⁴（江戸末期）写。六卷（但、巻四欠）。（漢籍）地理書・兵書などを欠く。
享保八年の御文庫の目録と考える理由は以下の如し。

（1）外題・扉題が「官府書目紅葉山御蔵」、かつ姜立綱筆『四書白文』（図書
函架番号506-32）など明らかな御文庫本が見えるため御文庫の目録。

（2）桜田御本たる『大明会典』（同402+96）が二四〇冊本として著録される
から、享保元々延享二年に成立した目録である。この間目録が編纂さ
れたのは、享保五・同八・同十八年の三度²⁵。

（3）享保五々十八年の新収書を『日記』『御文庫目録』により見出し、本
目録に照らせば、享保八年の書目と推断できる²⁶。

ふたつ目は東北大学附属図書館（狩野文庫）所蔵『御書目録』である（筆
者未見。マイクロフィルムによる）。明和年間の編纂とみる理由は次の如し。

（1）本目録所載図書が、他史料より明らかな御文庫本ばかりである。

（2）諸々の注記に見える年代の下限が宝暦十四年（朝鮮書翰^并別幅）「朝鮮
国^江返翰写）である——実は「天明三年」と『万天日録』の注記に見
えるが、そもそも同書は万治元年から天和三年までの記録で（『国書
総目録』、同書の他の注記には「有徳院様御小納戸ヨリ出」とあるか
ら「天明三年」は誤記で、宝暦十四年が最も下った年紀となる。

（3）先の朝鮮書翰や返翰の最後が例の宝暦十四年で、その次の朝鮮通信使
が来る以前——文化八年以前である。この間書目編纂は三度²⁸。

（4）そのうち「小目録」（寛政三々五年編）とするには注記が詳しすぎる。

（5）天明三年五月十日受入の「新規御預之御書物」（『日記』同日条）がい
ずれも載らないか、載っていても当該目録と『元治目録』では部数が

異なり、同日受入書と当該目録所載書は合致しないと推測される。

四 実隆筆『史記』のこと——各論(3)

今回の「史部」図書の中に、三条西実隆筆の『史記』がある。函架番号411-86。和装・大本・四三冊²⁹。永正七(一五二〇)〜十五年三条西実隆が元至元二十五年(一二八八)刊彭寅翁本を書写し、子息公条が紀伝点を加えた本。この一連の書写作業についてはつとに戦前『大日本史料』(第九編第二冊)に關連史料が集積され、また『図書寮典籍解題「漢籍篇」』に「史記正義」として詳細な解題もあり(一二五〜二六ページ)、筆者如きが屋上屋を架すことではない。むしろ述べたいのは長らく実隆書写とはされてこなかった事実についてである。

実は、享保八年まで「万里小路内大臣秀房筆」の「金沢本」³⁰とされていたのだ(例えば『日記』享保八年五月二十四日条)。五月二十四日に徳川吉宗が借出した該本につき、翌日側役(土岐左兵衛)から書写者の根拠(「極メ」)を問われ、根拠は「末卷之末」の書付で、疑わしき旨復命した(同二十七日条)。以後御書物奉行で吟味が続けられ、最後に古筆了音を呼んで鑑定させることになった(同八月六日条)。翌々日了音が登城し、「万里小路秀房之筆と八相見へ不申候、奥書之判形、手跡之跡道遥院実隆公筆と相見へ申候由」を書付にして土岐に渡し、土岐から目録へ実隆筆と書付けなるべく指示があった(同八日条)。この目録への書入れは現に『御書目録』中に見出すことができ。なお「末卷之末」の書付とは太史公自序第七十末にある本奥書、すなわち、

本云、着雍困敦之曆仲秋夕天、臨鶴髮五旬有六載之頽齡、終馬史一百三十篇之点写、細書欺老眼、苦学楽貧身而已。英房上章薤念点畢、

だと思しい。しかし、「本云」とはつきり書かれていて間違えようがないはずだが、誤解が誤解を生み、それが長い時間をかけて澱のように積重なったのだろう。延宝の『官庫書籍目録』では単に「英房筆」とのみあるが、この時点ですでにもう怪しげである。この目録編纂者人見竹洞の筆になる『紅葉山文庫日録』延宝八年閏八月十八日条には、

其跋有名、或曰英房、或曰槐陰逃虚子、而跋中所謂使諫議郎公条点之云々、公条者三条称名院也、然則逃虚子及英房者、乃是撰家之貴介也乎、可考之、○国立国会図書館蔵『竹洞全集』

とあるが、結局竹洞(および目録共編者の林鳳岡)はこの問題に答えを見つけられず、単に「英房筆」としたと思しい。

さてこの「英房」は万里小路秀房に非ず、儒者の家系に属する藤原式家の英房で、「本書は英房の史記抄を以て校合したもの」という。³¹

ちなみに幕初には公条筆と認識されていたのか、『羅山外集』卷六所収「丙辰紀行」(草案にあり浄書(本にない部分))には家康の蔵書を御三家に配分する際、「世にまれなる物をハ、少々江戸へさゝけらるへきとて、のけをき侍りし、称名院自筆の史記も其中にあり、」(○当部蔵黒川本(函架番号)傍点筆者)とある。

五 震災と紅葉山御文庫本——各論(5)

図書寮蔵御文庫本のうち、逸失しているのは、(ア)『後漢書』、(イ)『古今圖書集成』および(ウ)明治二十四年移管本の中ですでに部分的に明治六

年（一八七三）の皇居火災で失われたもの、の三種ある（イ）（ウ）はいずれも子部に属する。（ア）『後漢書』と（イ）『古今圖書集成』³²こそ、関東大震災（一九二三年）で焼失した本である。（イ）は子部で扱うこととして、今回は（ア）につき、『古芸余香』をもとに紹介し参考に供したい。

これは元版（とされる）『後漢書』二二冊である。当該書には幸い田中光顕『古芸余香』（楓山本宋版）の冊）に詳しく書誌を載せるから、おおよその姿を復原しうる。それに従い記せば以下の如きである。

図書寮蔵。大正函号 44。和装・大本・二一冊。〔南宋後半期〕刊[○]後元大徳・至大・元統等補刻。左右双辺有界10行19字、20・3×14・8程度（[○]『古芸余香』曰、「長、六寸七分、長短不問、中、四寸九分、全、長短不問」）、版心上方大小の字数を記す。

大徳・至大・元統の年号のある刻工名あり（年号不記の刻工名も）。加點奥書あり（移写か）。「秘閣図書之章（①ないしは②）」印押捺。

この書は『古芸余香』の記述を疑いなく読むと、一見元大徳刊本のようにだが、尾崎康『正史宋元版の研究』（汲古書院、一九八九年）によると元大徳（九年寧国路儒学）刊本は四周双辺10行22字（21・7×15・2）だといひ、刻工名もほぼ共通しない。一方尾崎氏が「〔南宋後半期〕刊（福清県学）元大徳九・一〇、至大一・二、延祐二、元統二年通修」とされる本（書陵部本（これも御文庫本。函架番号402-4、三五冊）も例示）の書誌を見ると、まさしくこれである。左右双辺、10行19字、20・6×14・6で、刻工名の重なりも多い（誤読・誤写の可能性もあるものも含めれば、もつとその割合は増す）。以上より、当該焼失本は三五冊本『後漢書』（函架番号402-4）と同版と考えてよい。³³尾崎氏の所謂「南宋後半期福唐郡庠刊本」だ。

同版本に小汀利得旧蔵本（国立歴史民俗博物館所蔵）があり、講読・加點に

関わる奥書類を持つが、これが当該焼失本の本奥書類に大略一致するのである（尾崎氏によれば、小汀旧蔵本のものも三条西本の（本）奥書類を林宗二が永祿六年（一五六三）に移点抄写したものとされ、識語がある。林の識語は『古芸余香』には記述されない）。しかも『古芸余香』にはそのうち三条西公衆奥書と思しきものに花押影が写されている。当該焼失本は三条西本そのものか、あるいは永祿六年以前に三条西本から花押影も含めて移点・移写されたものだろう。³⁶なお、当該書も『來歴志』著録本だが、この辺の事情は記さず、記述は淡白である。また、尾崎氏は前述の三五冊本『後漢書』の本奥書類もやはり三条西本のもの抄録かと推測される。³⁸

さて本書は延宝以前より御文庫にあつたものと考えられる。以下迂遠だが説明を試みる。明和の編纂と思しき例の『御書目録』には、元版で、『古芸余香』に見える奥書や訓点等の情報に対応する記述がある『後漢書』を載せ、二〇冊という。遡って延宝の編纂と思しき『官庫書籍目録』には古版で朱点本で二〇冊といひ、まさしく当該書だろうというわけである（『重訂目録』『元治目録』では「二十一冊」とあり、『御本日記附注』注文中も同然、大正の『帝室和漢図書目録』でも二二冊としているわけで、ここところは考究の余地がある）。斯くの如き考察により『官庫書籍目録』著録の二〇冊本を当該焼失本と考えると、早ければ延宝八年（一六八〇）以前、遅くともこの目録の成立の下限たる享保元年（正徳六年）以前の収儲とならう。

なお、当該書は長澤孝三氏が「明治二十四年宮内省に移管した内閣文庫本について（続の上）」（『北の丸』第二五号、一九九三年）で「宮内庁本との比定が出来なかつた」と述べられるうちの一本だが、宜なるかな。ここに附記して後人の助けとしたい。（子部に続く）

注

(1) 『來歴志』では一部として立っていないと、現在の整理に従い計上した。なお、『來歴志』所載本であるかどうかなど、福井保氏が検討しているが(福井「御書籍來歴志について」(『書誌学』復刊新壹号、一九六五年)、やや不審な点もある。

(2) 各図書の書誌については、以下のとおり。

- (A) 『故唐律疏義勳廷儀序』・図書寮文庫蔵。函架番号402-12。和装・大本・一冊。清雍正十三年伝勳廷儀撰写(○甚だ疑)。支子色無地表紙29・0×20・9。左肩双辺題簽「唐律疏義勳廷儀序文」(印刷枠内墨書)20・9×3・8。内題「唐律疏義序」。無辺無界4行8字(字高23・8)。漢文、楷書。撰者自筆。書入等なし。8丁。本文末「雍正乙卯仲夏経筵」(低2格)講官起居注刑部(低2格)尚書勳廷儀撰(行末)(朱方印^{○勳廷儀印(篆文)}陰刻^{3・3×3・3})^{○前行と}(朱方印^{○同冠之章(篆文)}陽刻^{3・2×3・2})。秘閣図書之章②・太政官文庫①・帝室図書之章⑤印、図書寮ラベル。下札「故唐律疏義勳廷儀序文」(横書)。表々紙右下朱書「共十八冊」。
- (B) 『故唐律疏義沈炳积文訂正』・図書寮文庫蔵。函架番号402-13。和装・大本・一冊。(享保十五年(一七三〇))沈炳撰・写。支子色無地表紙27・1×17・4(二本取)。左肩双辺題簽「唐律疏義沈炳积文訂正」(印刷枠内墨書)20・2×2・9。内題「唐律釋文」。無辺無界9行22字前後(本文低1格にて)。(字高23・7程度)。漢文、楷書。撰者自筆。符号等なし。9丁。奥書・識語等なし。秘閣図書之章②・帝室図書之章⑤・太政官文庫①印。図書寮ラベル。下札「故唐律疏義沈炳积文訂正」(横書)。表々紙右下朱書「共十八冊」。
- (C) 『故唐律疏義』(一五冊本)・図書寮文庫蔵。函架番号402-15。和装・大本・一五冊。唐長孫無忌等撰、(江戸中期)写、荻生茂卿校定。縦横刷毛目表紙(記録表紙)27・9×19・4(紺色角裂存。各冊表々紙右下隅冊次墨書。第八冊表々紙右下隅墨書「史部百番」「十五本 八」^{○この「八」は先に冊次。墨書と記せしものなり})。左肩双辺刷題簽中墨書「故唐律疏義 共十五」(一十五終)19・7×3・0(共十五)

首冊のみ)。泰定四年柳賛序、官職名氏、目録、永徽四年長孫無忌等表。本文書式、無辺無界8行18字(字高18・7程度)。漢文、楷書。句読点調点等なし。注小字双行。朱筆書入・頭書あり(校訂か)。五冊ごとに筆跡が変わる。秘閣図書之章①・紅葉山本④・帝室図書之章⑤印、旧「大学」ラベル(「史部/一四〇二七號/全十五」とあり)・図書寮ラベル。

(D) 『故唐律疏義』(一六冊本)・図書寮文庫蔵。函架番号402-17。和装・大本・一六冊。唐長孫無忌等撰、享保十二年荻生観校訂、享保十二年写、沈炳再校。浅葱色無地表紙27・8×18・2(支子色綴糸二本取^{○綴糸に})。左肩無辺題簽墨書「故唐律疏義^{名例}」の如し、18・1×3・4。尾冊は「唐律釈文」とす。泰定二年序、官職名氏、目録、永徽四年表。本文書式、無辺無界8行18字(字高20・6程度)。漢文、楷書。注小字双行。句読点等なし、返点・傍訓・豎点あり。行間校訂注、上部沈炳校訂注あり。第一五冊尾荻生観識語「日本頗多脱誤、今得水府善本、補之正之者、旁注水字水府本、猶有脱誤、今特補之正之者、旁注今字、/享保丁未二月(隔二格)講(隔一格)官(隔一格)物観校訂」。尾冊表々紙下札痕。秘閣図書之章②・紅葉山本④・「大学校図書之印」・太政官①・帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。首冊表々紙右肩ハリ紙^{〔宋等〕}「史一百」/天」9・7×7・0。

(E) 内閣文庫本『故唐律疏義』・国立公文書館(内閣文庫)蔵。請求番号 史100-2。和装・大本・一六冊。唐長孫無忌等撰、享保十年荻生観校、享保年間繕写。浅葱色艶出己繫文表紙27・7×20・1(綴糸薄茶色)。左肩無辺題簽墨書「唐律疏義^{名例}」(一^{廿九冊終断})(尾冊のみ「唐律釋文」)17・6×3・6。巻首に「新刊故唐律疏義序」(泰定四年秋七月既望文林郎江西等処儒学提学柳賛謹序とあり)、劉有慶序(泰定二年乙丑秋七月下弦日眉山劉(有慶)序とあり)、「議刊唐律疏義官職名氏」、「故唐律疏義総目録」、「故唐律目録」、「進律疏表」(永徽四年長孫無忌等)あり。内題「故唐律疏義卷第一(名例/凡七條)」の如し。本文無辺無界8行18字(本文自体は17字で字高19・5。内)、漢文、楷書。注小字双行。墨書傍注あり。尾題「故唐律疏義卷第一(三十終)」。第十五冊後遊紙表

- 校訂奥書「旧本頗多脱誤、今得水府善本補之正之者、旁注水府本、猶有脱誤、今特補之正之者、旁注今字、／享保丁未二月（隔二格）講（隔一格）官（隔一格）物（観）校訂」。秘閣圖書之章①・紅葉山本④・「大学校圖書之印」印。内閣文庫ラベル、首冊のみ旧ラベル。函号下札。首冊表紙右隅綴糸右に「共十六本」〔八〕〔八〕は朱字）、同左「史之部百番」と墨書。小口書「故唐律疏義一（十六止）。第二一六冊各冊前遊紙袋中に旧題簽。各冊前遊紙等に書写者と思しき人名を記した紙片（鈴木広五郎・樋口五右衛門（首冊）、鈴木左兵衛（第三・九冊）、池田七右衛門（第四・一〇冊）、嶋治平九郎（第五・一六冊）、河津治右衛門（第六・一三冊）、今村恒右衛門（第七・八冊）小林只右衛門（第一一・一二冊）、樋口五右衛門（第一四冊）、鈴木広五郎（第一五冊）。
- (3) 松平忠周（一六六一〜一七二八）は、綱吉時代に若年寄・側用人を務めて栄達し、綱吉薨去後はしばらく幕政より遠ざかったが、吉宗の代に京都所司代、次いで老中を務めた（『国史大辞典』）。彼の所司代在任中（享保二〜九年）『故唐律疏義』を献上したという（『日記』元文三年十二月二日条）。
- (4) 大庭脩『漢籍輸入の文化史』（研文出版、一九九七年）二四〇〜四三ページ。
- (5) このような著名人や高官の名を騙った序文・詩文などの偽作については、例えばさいきん米谷均氏が明代後期を中心に精力的に検討しておられる（米谷「中世日明関係における送別詩文の虚々実々」（『北大史学』五五、二〇一五年）。基本的には当該書もこの系譜を引くものと捉えてよい。また、この序を疑わなかったのは先人も同じで、文化年間の官版（例えば函架番号205-43（古賀本、一五冊））でも堂々と冒頭を飾っている。本当にたちが悪い。
- (6) 明治二十四年の移管の際、「来歴史ト符合致セサル」ものがあるとのこと（九部二八八冊が納付されている（宮内公文書館蔵『明治二十五年圖書録』（識別番号乙276）、明治二十六年一二号文書）。
- (7) 『安慶府志』の書誌は以下のとおり。

- 図書寮文庫蔵。函架番号402-65。線装・大本・八冊。明嘉靖二年李遜等撰、嘉靖年間刊。香色無地表紙31・5×18・3（柿色綴糸二本取）。左肩朱色無辺題簽墨書「安慶府志金（石・絲・竹・匏・土・革・木）」18・2×3・3（首冊題簽下墨書「共八冊」）。巻首「安慶府志旧序」（嘉靖元年春正月望郡人齊之鸞撰）、汪序（嘉靖元年春正月望門人汪漢撰）、「重修安慶府志引」（時秋七月望日禹江李遜識）、「重修安慶府志凡例」、および図を附す。内題「安慶志卷之一（三十一）」。版式左右双辺有界8行20字、22・6×12・9。句読点・返点・圈点等なし。注小字双行。版心は白口無魚尾「安慶府志卷之幾一各卷名 一 幾 一」の如し。朱句読点を附す冊あり。尾題「安慶志卷之一（三十一）」。各冊末巻の尾題下に版下本書写者と思しき人名あり、云く、「農民耿子明写」（首冊巻五尾題下）、「農民盛普写」（第二冊巻九尾題下）、「農民朱詰写」（第三冊巻一五尾題下）、「農民周棠写」（第四冊巻一六尾題下）、「吏蔡檄写」（第五冊巻一七尾題下）、「吏黄中孚写」（第六冊巻一九尾題下）、「吏陳一策写」（第七冊巻二二尾題下）、「農民項汴写」（尾冊巻三二尾題下）。蔵書印、朱方印「閩中／蔣玠」（篆文陰刻）1・4×1・5、朱方印「三徑／蔵書」（篆文陰刻）1・4×1・5、秘閣圖書之章①・帝室圖書之章⑤印。図書寮ラベル。小口書「金（木）」「安慶府志」。
- (8) 大庭『漢籍輸入の文化史』二二四〜一五ページ。
- (9) このことを記す『承寛棟録』○大日本史料史料稿本によるは当該『安慶府志』が落ちて二二部とある。『御代々文事表』○近藤正斎全集によるでは一三部である（大日本史料史料稿本所引のものは「十六部」とするが誤写ならん）。
- (10) 東京大学史料編纂所架蔵写真帳（四一冊、請求記号6171.08-17）。
- (11) 『大明会典』の書誌は以下のとおり。
- 図書寮文庫蔵。函架番号402-96。線装・大本・七〇冊。明徐溥等奉勅撰、明李東陽等修訂、明申時行等増修。明万曆十五年官版（補写あり）。改装浅葱色紙綴文表紙30・0×19・3（二本取）。左肩双辺刷題簽「大明會典」（白紙・赤紙）18・3×16・3。冒頭弘治十五年序、万曆十五年序、弘治万曆勅諭、

書名、文冊衙門、凡例、続纂凡例、重修題本、重修凡例、万曆五年重修表、重修職名、目錄を附す。四周双辺有界10行20字(23・8×16・3)、版心中黒口双向黒魚尾「會典卷幾 幾」、楷書、漢文、句点あり、注小字双行。補写部分は匡郭・界線・版心(中縫中「會典卷」まで)を刷ったものに毎行20字で墨書。秘閣図書之章①・帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル、旧「大学」ラベル(史九十二ノ一三九八七號ノ全七十)とあり。背に冊次。第二冊表々紙鉛筆書大正函号。第三冊表々紙ハリ紙「史ノ九十二番」。原書匣入(匣中ハリ紙「一之六番」)。

(12) 『皇明実録』の書誌は以下のとおり。

図書寮文庫蔵。函架番号453-4。線装・半紙本大・四〇〇冊。清代写、(柴野邦彦)校訂。欠巻あり。香色無地表紙24・6×16・2(二本取、黄色角裂存)。左肩無辺題簽墨書「太祖實録序表卷一之七」の如し、18・4×2・8。首冊前遊紙ハリ紙「書中処々墨消シ書直シ等ノ処ノ原本ヲ以テ校合仕候哉、又ハ後人ノ臆見ヲ以テ正シ候哉、写本ニテ不詳奉存候ニ付其儘ニテ指置申候、」(14・3×10・9) (*1)。内題「大明太祖聖神文武欽明啓運俊徳成功統天大孝ノ高皇帝實録卷之二」(卷二以下「大明太祖高皇帝實録卷之二」の如し)。四周双辺有界青色印刷匡郭野線内墨書10行20字(20・4×13・5)、版心白口單下向青魚尾、魚尾下〇印、中縫下象鼻境單線。但、用箋は世宗以降差異あり、例えば神宗実録の如きは四周單辺無界黒色印刷匡郭内墨書(行数字数同然)、柱部分「皇明實録萬曆」と朱押捺(*2)。漢文・楷書体。朱読点あり。尾題、内題同然。奥書なし。秘閣図書之章①③・帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。旧帙付。首冊表々紙右隅「来歴志本前編」と朱書された紙片貼付。原書匣入。

(*1) このハリ紙につき三田村氏は「嘉靖以後のものゝ表紙の裏に」ある旨記す。例外はあれ、確かに嘉靖以後、およそ毎帙一枚入っているようである。

(*2) これらにつき三田村氏は太祖ノ武宗を「藍格十行本」、世宗ノ神宗を「黒粹無格本」と呼ぶ。本文の精粗の境も同じく、前者は「私が寓目した

諸本中、最良の精寫本である事を確信する」といい、後者を「内容に於ても、前者に較べて極めて悪きものである」という。

(13) 三田村泰助「明實録の傳本に就いて」(『東洋史研究』八一、一九四三年)。

(14) 本書が『来歴志』所載本でないことは、つとに福井氏が指摘されており(福井「御書籍來歴志について」、従うべきである。柴野の校訂については凡そ『来歴志』に拠っており、それゆえに検討を要するのだが、現に校訂痕や邦人による校訂を証する紙片が存在するので(注(12)参照)、いよいよ難しい問題である。なお柴野補写については『日記』『始末記』の各々享和元年八月九日条に見える(福井保「紅葉山文庫」(郷学舎、一九八〇年)七二ページ、氏家幹人「書物方年代記④」(『北の丸』四五、二〇一三年)参照)。

(15) 『宣大山西三鎮図説』の書誌は以下のとおり。

図書寮文庫蔵。函架番号455-3。折帖・特大横本・三帖。明楊時寧等撰。黄茶色牡丹唐草文絹表紙40・5×36・4。中央金銀双郭茶色絹題簽墨書「九邊聖跡圖天(地)人」27・3×8・0。帯図本。絹本着色・墨書。半面ずつ右を図、左を文とするもの(35・3×31・2)も見開きで各々図・文とするもの(折目を挟んで35・3×66・5)もあり。文は、無辺無界、半面18行25字、楷書、漢文。各図・文には「鳳梧謹封」(朱長方印)・「培慶堂記」(朱方印)・「楊延春印」(朱方印陰刻)・「物外問人」(朱長方印陰刻)のいずれかが捺されるようだが、各々小さく、布地に捺されるので今判然とせぬもの多し。尾帖末に「職名(楊自寧等の名が見える)、萬曆八年後序・張悌萬曆十一年進士後序・白希繡萬曆二年進士後序、萬曆三十一年十月日」がある。秘閣図書之章①・帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。

(16) 『帝鑑図説』の書誌は以下のとおり。

図書寮文庫蔵。函架番号500-64。折帖・特大本・二帖。明張居正等撰、明(万曆年間)潘允端刊。帯図本。改装縹色巾繫文表紙50・2×41・3。中央無辺茶色題簽墨書「御覽帝鑑圖説上卷(下卷)」(朱印A)「朱方印」知止ノ堂(篆文陰刻、2・6×2・6) 32・0×5・3。「帝鑑図説叙」(万曆元年陸樹声)、

- 「聖哲芳規」四大字(上)・「狂愚覆轍」四大字(下)。内題なし。版式、四周双辺、丁中右半図(右肩別枠中篇題)、左半本文(有界22行35字(37・4×36・3)。楷書、漢文。読点あり。白抜丸囲「解」字以下低1格。版心白口下向白単魚尾「帝鑑圖説」幾(丁付上下別)。精刻、早印。補写あり。尾題なし。
- 「帝鑑図説頌并序」(万暦元年潘恩)、「帝鑑図説後序」(万暦元年王希烈)、「帝鑑図説序」(万暦元年王宗沐)。刊記・奥書・識語等なし。B朱長方印「家在九峯高処」(篆文陽刻) 4・2×2・2、C朱方印「王業浩印」(篆文陰刻) 4・5×4・5、D朱方印「松儻竹伴」(篆文陰刻) 4・4×4・4、E朱方印「吉日/癸巳」(篆文陰刻) 4・9×4・9、F帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。塗箱(箱書「帝鑑図説」六冊)。
- (17) 秀頼版も本文九行一九字である。なお、川瀬一馬氏は「其の底本となりたる種の明版、彰考館文庫或は駿河御譲本なる可し」としている(川瀬『増古活字版の研究』(The Antiquarian Booksellers Association of Japan, 1967) 上巻二三二ページ)。(この彰考館本とは『彰考館図書目録』(彰考館文庫、一九一八年)一二一四ページに載る「万暦癸酉」(○序年)刊の六冊本に相当か。なお図書寮文庫にも明版を蔵するが(徳山毛利本、函架番号216-8、線装・大本・一冊、四周双辺有界9行19字、帯図本)が同版かどうかは彰考館本を見しなから、筆者には分からぬ。ちなみに徳山本は一見したところ秀頼版のもとと同版とは看做し難いように思う。後考を俟つ。
- (18) 林麗江「晚明規諫版畫《帝鑑圖説》之研究」(『故宮學術季刊』三三二、二〇一五年)。本論文は板倉氏の御教示により知った。
- (19) 『御文庫目録』には年号不記(寛永十六年(二六三九)以前収録とされる)の項と寛文十一年の項に『帝鑑図説』を載せるが(二部とも冊数不記)、前者は『来歴志』に「東照大君御前ノ書」として載せる六冊の写本と考えられるので、後者が該本と推定した。
- (20) 『康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写』の書誌は以下のとおり。
 図書寮文庫蔵。函架番号E1-19。卷子装・特大・一卷。清康熙二十八年十月十日付、江戸前期模写。改装金茶色唐草文絹表紙、本紙62・2×199・7(墨付二枚、第一紙横幅65・0)、黄染紙。漢文13行18字(除日付部分)、満文13行(同)。帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。原筒・箱附属。↓補注
- (21) 『混一歴代國都疆理図』の書誌は以下のとおり。
 図書寮文庫蔵。函架番号E4-7。明嘉靖五年楊子器原編、絹本着色・特大・一幅。本紙部分176・5×181・6。内題「混一歴代國都疆理之圖」(篆文、横書)。帝室図書之章⑤印。箱入。中国・朝鮮を中心とし、郡名・都市名・河川等を記す。修補痕あり。嘉靖五年の年紀を有す。「楊子器跋」三代大江南雖入職貢、未為中土、漢唐拓地、雖「遠漢捐朱崖蔑甌越、唐至中葉失河北、遂不」能復、不至有宋之棄燕雲、又不足吉也、胡元入主「中国、開闢以來之世略敗壞已極、我」(又稿)「聖明起而逐之、不假九合之力、卒世不世之」(僅)「薄海内外」俱入版図、觀夫兩京畿之相望、十三省之環、百五十二府、百四十州一千一百二十七県之繫屬、四百九十三衛、二千八百五十四所、交錯布列、為之保障、若宣慰司十二、宣撫司十一、招討安撫司十九、長官司百七十七、亦「若不革其野心、以聽省府約束外、若朝鮮、安南」等国五十六、速温河等地五十(僅)「奴兒于、烏思藏等」都司所隸二百三十(僅)「亦皆來朝貢、一」(統)「之資、万古」(僅)「見、孔子曰、管仲一匡天下、民到于今受其賜、微」(僅)「管」(僅)「吾其被髮左袒矣、夫管」(僅)「挫受封之楚、」(僅)「孔子猶以為受賜、況淨掃弥天」(僅)「其功高過於」(僅)「遼王、吾民受賜可勝既哉、敷時繹思維徂求定、此」輿地図所以有補於政体也、間嘗參考大明一統志及「官制而布為是図、比諸家詳略頗異、若京師、若省、若府」州県、若衛、若所、若衛所之並居府州県者、若内外夷方之「師化与賓服者勢而異其形、遠近險易、一覽可觀、願治」者常目在為、則於用人行政諒能留意、慈溪楊子器跋、(□は虫損)。
- (22) 藤井讓治・杉山正明・金田章裕 編『絵図・地図からみた世界像』(京都大学大学院文学研究科、二〇〇四年)。当該諸図の一部を口絵写真として掲載し、解説も加えている。またこれらを扱ったInoue Mitsuaki(井上充幸)「The Development of the Map of Yang Ziqi in East Asia」(「東アジアにおける楊子器図の展開」)を載せ、併せて二六一―六二二ページに書誌データや参考文献を掲

げる。これを改編した同三氏編『大地の肖像』（京都大学学術出版会、二〇〇七年）も同様である（井上論文「第十四章」東アジアにおける楊子器図の展開）を載す。妙心寺麟祥院本は絹本着色、京都大学文学部地理学教室本は紙本着色で、宮内庁本ないしは麟祥院本の模写と推定されている（絵図・地図からみた世界像」口絵解説）。彰考館本についてはつとに青山定雄氏が、「明代の地図について」（『歴史学研究』七一―、一九三七年）で紹介している。青山氏がこの論文以前、「古地誌地圖等の調査」（『東方学報』東京第五冊続篇、一九三五年）で紹介せられた「大連圖書館の支那古地圖」（原文ママ）が現在旅順博物館に蔵されるものである（井上「東アジアにおける楊子器図の展開」）。

(23) Inoue 'The Development of the Map of Yang Ziqi in East Asia' および同「東アジアにおける楊子器図の展開」。

(24) 『官府書目』の書誌は以下のとおり。国立国会図書館（古典籍資料室）蔵。請求記号I43.17。和装・大本・一冊。六卷（巻四欠）。享保八年編（江戸末期）写。香色無地表紙26・5×18・3（修補痕あり）。左肩双辺題簽「官府書目紅葉山御藏」（印刷枠内墨書○本文）20・0×3・9。各巻扉1丁、左肩墨書「官府書目紅葉山御藏」の如し（巻二以降小字部分なし○本文と巻四につき「参」字下朱書「恐ラクハ肆卷ヲ合併セルニテ肆文字ヲ脱セシナラン」○誤り）。内題なし。無辺無界每半2段10行（各行字数不定○一部書名長大につき1段とする所あり）。楷書。字高19・6前後（1段9・4前後）。書写者による墨書注記・朱筆書入あり。墨付94丁。巻一・儒書・礼楽、巻二・諸子・史類・法式并官職、巻三・詩文、巻五・類書并雜品、巻六・和書（下位分類あり）。尾題なし。奥書・識語等なし。朱方印「東京／圖書／館藏」（篆文陽刻）4・8×4・9。東京図書館・帝國図書館・国会図書館新旧ラベル。小口書「官府書目完」。背の小口に黒スタンプ「二七」押捺。

(25) 森潤三郎「紅葉山文庫の書目編纂事業」（『考證學論攷』、青裳堂書店、一九七九年）、福井「紅葉山文庫」八八・九〇～九一ページ。

(26) 具体的な書名を記せば、『博古図』一六冊（享保六年取儲（御文庫日録）、本日）

『広東府賦役全書』（享保六年取儲）・『広平府賦役全書』（享保七年四月九日収）・『大清会典』一四一冊（享保七年四月九日収）。

(27) 『御書目録』は東北大学附属図書館狩野文庫蔵。請求記号90.6。和装・六冊（筆者未見にして『狩野文庫マイクロ版集成 補遺版』（丸善株式会社）によったので、大きさが正確には分からぬ。写真の蔵書印の大きさより推するに、横中本三冊、大本三冊ならん）。なお同館の目録やマイクロ版の目録でも旧幕府の書目だと看做されている。

(28) 森「紅葉山文庫の書目編纂事業」、福井「紅葉山文庫」八八・九一ページ。

(29) 図書寮文庫蔵、函架番号401.86。和装・大本・四三冊。漢司馬遷撰、永正七（十五年）三条西実隆写（底本元至元二十五年刊本）、同公条加點。香色無地表紙28・0×21・5。左肩無辺題簽墨書「史記第一五帝」。本文無辺無界10行21字。内題「五帝本紀第一 史記一」の如し。詳しい書誌については『図書寮典籍解題』に譲る。なお同書に「尚、本書は徳川家康が尾張・紀伊・水戸の三家に分譲した、所謂駿河御讓本に属し、これは尾張家の旧蔵にかかる。」とあるのは誤りで、幕初より紅葉山御文庫にあったものである（『丙辰紀行』○山外集）。

(30) 親本たる東福寺蔵本（実隆公記、永正八・七・二十五条）史記本返二遣東福寺二、○三条西実隆氏編輯刊本が、金沢文庫旧蔵の元至元二十五年刊本の可能性は十分想定できる。しかし該本存否定かならず、また英房との関係も未詳。

(31) 『図書寮典籍解題「漢籍篇」』一二六ページ。

(32) すでに触れた『皇明実録』とともに輸入され、明治三十四年に図書寮から東京帝国大学に移管せられたものである。

(33) 関東大震災の際の図書寮における状況は、すでに杉榮三郎図書頭（震災当時）の回顧談（『図書寮と帝室博物館の思い出』（『日本歴史』一九五、一九六四年））や、当時の寮員両角運右エ門の手記（『重要雑録 自大正一〇年至昭和五年』（『図書寮、識別番号 二四一八五』所収）を用いた堀口修「関東大震災と図書寮」（『宮内省の公文書類と図書に関する基礎的研究』（創泉堂出版、二

収書年次	登録番号	旧御物	引継時	旧函号1 (明治)	旧函号2 (大正)	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備考
文化14(来・化)	6766	○	在25	甲429	貴	秘	①	
幕初(駿)	6849	○	在36	甲442	な57	秘	①	
明和5以前(書)	6751	○	在19	甲423	な41	秘	①	
幕初(駿・本)	6752	○	在19	甲423	な41	秘	①	
嘉永2(新)	6754	○	在20	甲424	な42	秘	①	
嘉永2(新)	6753	○	在20	甲424	な42	秘	①	
文化13(近・化)	6756	○	在21	甲425	な43	秘	③	
文政11(佐)	6755	○	在21	甲425	な43	佐	①	
享保元以前(官)	6758	×	在22	甲426	な44	秘	① or ②	秘閣図書之章印(芸)
幕初(駿・本)	6757	○	在22	甲426	な44	秘	①	
幕初(駿・本)	6759	○	在23	甲427	な45	秘	①	
幕初(駿・本)	6760	○	在23	甲427	な45	秘	①	
文政11(佐)	6765	○	在24	甲428	な46	佐	①	
文政11(佐)	6763	○	在24	甲428	な46	佐	③	
文政11(佐)	6764	○	在24	甲428	な46	秘	①	
天明4以前(日)	6762	○	在24	甲428	な46	秘	④	
嘉永2(新)	6761	○	在24	甲428	な46	秘	①	
文政11(佐)	6772	○	在26	甲430	な47	佐	①	
寛保4(※享保(右))	6770	○	在26	甲430	な47	秘	②	「共十八冊」ツレ 内閣文庫(史100-2)
享保(右)	6771	○	在26	甲430	な47	秘	②	
文政11(佐)	6769	○	在26	甲430	な47	秘	①・④	
享保(来・書)	6767	×	在26	甲430	な47	秘	①・④	享保2~9献上(日)
文政11(佐)	6773	○	在26	甲430	な47	佐	①	
享保(来)	6768	○	在26	甲430	な47	秘	②・④	
文政11(佐)	6775	○	在26	甲430	な47	佐	①	
文政11(佐)	6774	○	在26	甲430	な47	佐	①	
文化8(化)	6778	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文化8(化)	6777	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文化11(化)	6786	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文化11(化)	6785	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文化8(化)	6779	○	在27	甲431	な48	秘	①	
天保7~元治2 (重+元)	6788	○	在27	甲431	な48	秘	①	
天保7以前(重)	6781	○	在27	甲431	な48	秘	①・②	
享保元以前(官)	6776	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文化14(化)	6790	○	在27	甲431	な48	秘	②	
文政11(佐)	6789	○	在27	甲431	な48	佐	①	
天保7以前(重)	6783	○	在27	甲431	な48	秘	①・③	
天保7以前(重)	6780	○	在27	甲431	な48	秘	②	
天保7以前(重)	6784	○	在27	甲431	な48	秘	①	
天保7以前(重)	6782	○	在27	甲431	な48	秘	①	
承応元(御)	6792	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文政11(佐)	6791	○	在27	甲431	な48	佐	①	
天保7以前(重)	6787	○	在27	甲431	な48	秘	①	
文政11(佐)	6793	○	在27	甲431	な48	佐	①	
文政11(佐)	6794	○	在28	甲432	な49	佐	①	
享保元以前(官)	6798	○	在29	甲433	な50	秘	①	
幕初(御)	6800	○	在29	甲433	な50	秘	①	
文政11(佐)	6801	○	在29	甲433	な50	佐	①	
文政11(佐)	6802	○	在29	甲433	な50	佐	①	
天保7以前(重)	6795	○	在29	甲433	な50	秘	①	
文政11(佐)	6797	○	在29	甲433	な50	佐	①	
文政11(佐)	6799	○	在29	甲433	な50	佐	①	
寛文11(御)	6796	×	在29	甲433	な50	秘	①	
享保元以前(官)	6803	×	在29	甲433	な50	秘	×	

分類略号

正史	正史類	政科	政書類科制之属
編年	編年類	政造	政書類造管之属
本末	紀事本末類	政職	政書類職考之属
別史	別史類	政治	政書類治務之属
雜史	雜史類	吏務	吏務類
詔綜	詔奏類綜類之属	目経	目録類経籍之属
詔別	詔奏類別類之属	目金	目録類金石之属
実録	実録類	史評	史評類
伝聖	伝記類聖賢之属	地総	地理類総志之属
伝名	伝記類名人之属	地通	地理類通志之属
伝総	伝記類総録之属	地府	地理類府志之属
譜牒	譜牒類	地州	地理類州志之属
史抄	史抄類	地県	地理類県志之属
載記	載記類	地衛	地理類衛志之属
時令	時令類	地河	地理類河渠之属
職制	職官類官制之属	地古	地理類古蹟之属
職箴	職官類官箴之属	地山	地理類山水之属
政通	政書類通制之属	地遊	地理類遊記之属
政典	政書類典制之属	地外	地理類外記之属
政邦	政書類邦計之属	地図	地理類図絵之属
政軍	政書類軍政之属	地雜	地理類雜記之属
政令	政書類法令之属	地辺	地理類辺防之属
政賦	政書類賦役之属	子道	子部道家類
政例	政書類法例之属	集別上	集部別集類上
政詔	政書類詔諭之属	国番琉	国番部番外琉球書翰類

図書寮蔵紅葉山御文庫本目録（史部）

函架 番号	現行書名	刊写	員数	〈元治増補〉（楓山文庫）御書籍目録		来歴志 所載
				書名	分類	
400-1	通典	宋版（ 北宋，補写 ）	44	通典	政通	○
401-6	〈東萊先生〉十七史詳節	朝鮮版（ 銅活字，補写 ）	110	十七史詳節	史抄	○
401-85	史記正義	元版（ 至元25版 補写・加點 ）	40	史記	正史	○
401-86	史記	室町写（ 永正15三条西実隆写，同 公条加點，摸元版 ）	43	史記	正史	○
401-87	三国志	宋版（ 補写 ）	25	三国志	正史	○
401-88	前漢書	明版（ 正統8版，補写 ）	37	漢書	正史	○
402-1	貞觀政要	古活字版（ 慶長5木活字 ）	8	貞觀政要	雜史	○
402-2	前漢書	宋版（ 元補版，補写 ）	43	漢書	正史	○
(焼失)	〔後漢書〕	関東大震災で焼失	21	後漢書	正史	○
402-3	前漢書	宋版（ 南宋末版，元補版，補写 ）	35	漢書	正史	○
402-4	後漢書	宋版（ 南宋末版，大徳9・元統2補版 補写 ）	35	後漢書	正史	○
402-5	唐書	朝鮮版（ 銅活字 ）	32	唐書	正史	○
402-6	張可庵先生疏稿	明版（ 万曆41版 ）	6	張可庵疏稿	詔別	○
402-7	明季南北略	清写（ 康熙10写 ）	37	明季南北略	雜史	○
402-8	玉燭宝典	江戸写	6	玉燭宝典	時令	○
402-9	大唐六典	江戸版（ 享保9版 ）	30	唐六典	職制	○
402-10	東都事略	宋版（ 補写 ）	14	東都事略	別史	○
402-11	史学提要	元版	1	史学提要	史評	○
402-12	故唐律疏義序文	清写（ 雍正13伝自筆 ）	1	} 元治目録記載なし	/	○
402-13	故唐律疏義積文訂正	江戸写（ 享保15 ）	1			○
402-14	故唐律疏議 附：名例	元版（ 至正11版 ）	4	別本故唐律疏議	政令	○
402-15	故唐律疏義	江戸写（ 江戸中期 ）	15	故唐律疏義	政令	○
402-16	〈新編〉方輿勝覽	宋版（ 補写 ）	23	新編方輿勝覽	地総	○
402-17	故唐律疏義	江戸写（ 享保12 ）	16	故唐律疏義	政令	○
402-18	通州志	明版（ 万曆版 ）	8	通州志	地州	○
402-19	広西通志	明版（ 万曆24版 ）	20	広西通志	地通	○
402-20	明季実録	清写	4	明季実録	実録	
402-21	五代史纂誤	清写	1	五代史纂誤	正史	
402-22	昭忠録	清写	1	昭忠録	伝総	
402-23	東觀奏記	清写	1	東漢奏記	雜史	
402-24	南疆逸史	清写	8	南疆逸史	別史	
402-25	輿図要覽	清写	4	輿図要覽	地総	
402-26	劫灰録	清写	2	劫灰録	雜史	
402-27	〈東萊校正〉五代史詳節	元版	3	十七史詳節殘本	史抄	
402-28	范文正公政府奏議	明版（ 嘉靖40版 韓叔陽重刊 ）	2	范文正政府奏議	詔別	
402-29	嘉禾志	清写	12	嘉禾志	地県	
402-30	明末五小史	清写	8	明末五小史	本末	
402-31	幸存録	清写	1	幸存録	雜史	
402-32	甲申伝信録	清写	2	甲申伝信録	雜史	
402-33	七家集	清写	4	七家集	雜史	
402-34	朱子実紀	明版（ 正徳版 ）	6	朱子実紀	伝名	
402-35	雲中奏議	明版（ 嘉靖版 ）	4	雲中奏議	詔別	
402-36	輿図要覽	清写	4	輿地総図	地総	
402-37	宋名臣言行録	朝鮮版（ 補写 ）	13	宋名臣言行録	伝総	
402-38	晋書	朝鮮版	54	晋書	正史	
402-39	中興実録	明版	1	中興実録	実録	
402-40	天鑑孤忠録	明版	1	天鑑孤忠録	伝名	
402-41	高志伝	明版（ 嘉靖12版 ）	1	高志伝	伝総	
402-42	広卓異記	清版	2	広卓異記	伝総	
402-43	竊憤録	清写	2	竊憤録	雜史	
402-44	洪武聖政記	明写（ 正徳9写 ）	16	洪武聖政記	実録	
402-45	鄂国金陀粹編	明版（ 嘉靖37版 ）	10	鄂国金陀粹編	伝名	
402-46	万曆疏鈔	明版（ 万曆版 ）	33	万曆疏抄	詔総	
402-47	古今逸史	明版	24	古今逸史	子雜編	

享保元以前(官)	6807	○	在30	甲434	な51	秘	①	漢書詳節14冊(官)
承応3(御)	6809	×	在30	甲434	な51	秘	①	
文政11(佐)	6812	○	在30	甲434	な51	佐	①	
文政11(佐)	6804	×	在30	甲434	な51	佐	①	
文政11(佐)	6815	×	在30	甲434	な51	佐	×	
文政11(佐)	6811	○	在30	甲434	な51	佐	①	
承応元(御)	6805	×	在30	甲434	な51	秘	①	
文政11(佐)	6808	○	在30	甲434	な51	佐	①	
文政11(佐)	6806	○	在30	甲434	な51	佐	①	
文化6(化)	6813	×	在30	甲434	な51	秘	①	
文化14(化)	6810	○	在30	甲434	な51	秘	①	
正保元(御)	6818	○	在31	甲435	な52	秘	②	
承応元(御)	6817	○	在31	甲435	な52	秘	①	
文政11(佐)	6824	○	在31	甲435	な52	佐	①	
享保11~13(船・日)	6823	○	在31	甲435	な52	秘	①	
文政11(佐)	6819	○	在31	甲435	な52	佐	①	
享保6(前)	6821	○	在31	甲435	な52	秘	①	
享保8(日 cf. 船)	6820	○	在31	甲435	な52	秘	①	
享保11~13(船・日)	6822	○	在31	甲435	な52	秘	①	
延宝8~正徳6(官)	6816	○	在31	甲435	な52	秘	①	
文化3(化)	6830	○	在32	甲436	な53	秘	①	
文政11(佐)	6835	○	在32	甲436	な53	佐	①	
承応3(御)	6829	○	在32	甲436	な53	秘	①	
文政11(佐)	6833	○	在32	甲436	な53	佐	①	
文政11(佐)	6832	○	在32	甲436	な53	佐	①	
文政11(佐)	6834	○	在32	甲436	な53	佐	①	
*享保元以前(官/万治元(御))	6831	○	在32	甲436	な53	秘	①	
享保10(船)	6825	○	在32	甲436	な53	秘	①	
文政11(佐)	6826	○	在32	甲436	な53	佐	①	
文政11(佐)	6827	○	在32	甲436	な53	佐	①	
明暦元(御)	6828	○	在32	甲436	な53	秘	①	
幕初(駿・御・本)	6836	○	在33	甲437	な54	秘	①	
享保元以前(官)	6847	○	在34	甲438	な55	秘	①	
文政11(佐)	6843	○	在34	甲438	な55	佐	①	
万治3(御)	6844	○	在34	甲438	な55	秘	①	
文政11(佐)	6837	○	在34	甲438	な55	佐	①	
文政11(佐)	6841	○	在34	甲438	な55	佐	①	
文政11(佐)	6839	○	在34	甲438	な55	佐	①	
文化4(化)	6840	○	在34	甲438	な55	秘	①	
文政11(佐)	6838	○	在34	甲438	な55	佐	①・③	
文政11(佐)	6842	○	在34	甲438	な55	佐	①・③	
正徳3(桜)	6850	○	在37	甲443	な58	秘	①	
文政11(佐)	6848	○	在35	甲439-441	な56	佐	②	
宝暦14(日・辰 cf. 始)	6855	○	在42	甲448-450	は25	秘	①・③	
明暦元(御)	6853	○	在40	甲446	は55	秘	①	
幕初(御)	6854	○	在41	甲447	は56	秘	①	「天下九辺聖跡(蹟)図」(御/官)
寛文11(御)	6851	×	在38	甲444	あ44		×	
幕初(駿)	6857	○	在44	甲452	か32	秘	①	
文政11(佐)	6852	○	在39	甲445	貴	秘	①	
幕初(駿・御)	6746	○	在14	甲418	さ36	秘	①	
元禄~正徳(日 etc.)	6859	○	在46	甲454	は208		×	
*享保9以前(日/明和5以前(書))	6856	○	在43	甲451	は223		×	

典拠略号

駿	駿府御文庫本たるによる
慶	慶長御写本たるによる
桜	桜田御文庫本たるによる(『官』第6冊)
佐	佐伯毛利本たるによる
前	前田綱紀献本
新	新見正興献本
近	近藤守重献本
本	御本日記
来	来歴志
始	御文庫始末記
日	御書物方日記
御	御文庫目録
官	官庫書籍目録(1~5)
書	御書目録
重	重訂目録
重+元	重訂目録と元治目録を併せ勘う
実	徳川実紀
寛	寛政重修諸家譜
右	右文故事
昆	昆陽漫録
人	人見竹洞全集所収紅葉山文庫日録
没	文政11幕府没収本
芸	古芸余香
辰	辰壺番唐船輸入本
*	それと思しき書あり(確定に非ず)

402-48	〈東萊先生〉西漢詳節	明版	14	十七史詳節殘本	史抄	
402-49	史綱要領	明版 (万曆版)	8	史綱要領	史抄	
402-50	大金集礼	清写	12	金集礼	政典	
402-51	広群輔録	清版 (康熙9版)	2	広群輔録	伝総	
402-52	栖真志	明版	2	栖真志	子道	
402-53	牧民心鑑	朝鮮版 (永樂10版)	1	牧民心鑑	職箴	
402-54	孝友伝	明版	8	孝友伝	伝総	
402-55	〈古今歴代標題註釈〉十九史略通攷	朝鮮版	7	十九史略通攷	史抄	
402-56	兩漢博聞	明版 (嘉靖版)	12	兩漢博聞	史抄	
402-57	古今経世格要	明版	6	古今経世格要	政治	
402-58	歳時広記	明版	2	歳時広記	時令	
402-60	〈鼎鑄欽頒弁疑律例〉昭代王章	明版	4	明代王章	政令	
402-61	皇明臣諡類抄	明版 (万曆6版)	1	明臣諡類抄	政典	
402-62	撫州府志	明版 (嘉靖33版)	8	撫州府志	地府	
402-63	常山県志	清写	8	常山県志	地県	
402-64	皇輿考	明版 (嘉靖40後印)	4	皇輿考	地総	
402-65	安慶府志	明版 (嘉靖版)	8	安慶府志	地府	
402-66	〈重修〉四川総志	明版 (万曆47版)	20	四川総志	地通	
402-67	江山県志	清写	4	別本〔本〕江山県志	地県	
402-68	諡法通考	明版 (万曆24序)	16	諡法通考	政典	
402-69	〈重修〉英徳県志	清写	7	別本英徳県志	地県	
402-70	〈重刻〉太倉州志	明版 (崇禎2版)	6	太倉州志	地州	
402-71	〈新修〉白鹿洞書院志	明版 (万曆20版)	8	白鹿洞志	地古	
402-72	平陽県志	明版 (万曆18版)	1	平陽県志	地県	
402-73	靈巖記略	清版 (康熙版)	2	靈巖記畧	地古	
402-74	北関新志	明版	4	北関新志	地衛	
402-75	〈重刻〉天目両山合志	明版 (天啓4版)	4	別本東西天目合志	地山	
402-76	建寧府志	清写	32	建寧府志	地府	
402-77	嘉興県志	明版 (崇禎10版)	21	嘉興県志	地県	
402-78	台湾府志	清版 (康熙51版)	8	別本台湾府志	地府	
402-79	〈万曆重修〉杭州府志	明版 (万曆7版)	27	杭州府志	地府	
402-80	大明一統志	明版 (天順5官版 駿府文庫本)	24	明一統志	地総	○
402-82	常熟県水利全書	明版	12	常熟県水利全書	地河	
402-83	蜀中方物記	明版	3	蜀中方物記	地雑	
402-85	皇明表忠記	明版 (崇禎6版)	5	明表忠記	伝総	
402-86	徐州志	明版 (嘉靖版)	6	徐州志	地州	○
402-87	華蓋山志	明版 (天啓7版)	2	華蓋山志	地山	○
402-88	〈重刻〉長洲県志	明版 (万曆26版)	10	長洲県志	地県	○
402-89	武義県志	明版 (嘉靖3版)	4	武義県志	地県	○
402-90	山陰県志	明版 (嘉靖版)	4	山陰県志	地県	○
402-92	東西洋考	清写	12	東西洋考	地外	
402-96	大明会典	明版 (万曆15官版 補写)	70	重脩明会典	政通	
403-32	文献通考	元版 (補写, 明成化・弘治 修・後印 (監本) あり)	102	文献通考	政通	○
453-4	皇明実録	清写 (〔柴野邦彦〕校)	400	明十二朝実録	実録	
454-4	歴代通鑑纂要	明版 (正徳2官版)	60	歴代通鑑纂要	編年	○
455-3	〈宣大山西〉三鎮図説	明写 (万曆31写)	3	三鎮図説	地辺	○
500-64	帝鑑図説	明版 (万曆元官版)	2	別本帝鑑図説	史評	○
506-36	陸宣公集	朝鮮版 (成化10版)	4	陸敬輿集	集別上	○
510-3	太平寰宇記	宋版 (「金沢文庫」印)	25	太平寰宇記	地総	○
511-39	戦国策	明版 (万曆9版)	3	戦国策校注	雑史	○
E1-19	康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写	江戸写 (模写)	1	康熙帝封冊写	国番琉	
E4-7	混一歴代国都疆理図	写 (嘉靖5跋)	1	歴代国郡疆理図	地図	○

107部 (現存106部)

1899点 (現存1878点)

〇(一年)に詳しいので、そちらに就かれない。

- (34) 尾崎氏は毎行一八字とされるが、原刻とされる丁(*)でも毎行一九字であり、また『古芸余香』の三五冊本『後漢書』の記述にも「十行十九字」とある。近藤重蔵の『御本日記附注』にも版式が三五冊本『前漢書』(寮本函架番号402-3)——当該項に「十行十九字」とある——と同じだという。

(*) 尾崎『正史宋元版の研究』二八一ページ、原刻の刻工名から原刻の丁を探した。具体的には、例えば第九冊列伝第二十下第一二丁(刻工「葛文」)。

- (35) 『日記』文化十四年二月二十九日～三月一日条に両者同版との調査の記事あり(福井『紅葉山文庫』一二九ページも参照のこと)。

- (36) ところで『図書寮典籍解題「漢籍篇」』一三一ページに当該焼失本につき、

「この二十一冊本は当部に収蔵後大正大地震で焼失したが、附注(○白井注、『御本日蔵附』)によれば、三条西家旧蔵本とみられ寛仁・万寿・応徳・元永・保安・保元・寿永・嘉禎・文永など平安・鎌倉期の識語を多く存し、掲出本(○白井注、三書)の識語はその僅に一部の抄写と思われる。」と記す。ちなみに三五冊本第一七冊列伝第二十九末にも当該焼失本とは別のものながら、「都督郎」の花押があり——『古芸余香』によれば列伝第二十九には識語がない——その形状は『古芸余香』所引の複数の識語に見える花押影とおおよそ似通っている。

- (37) 『図書寮典籍解題「漢籍篇」』一二九～三〇ページ参照。

- (38) 尾崎『正史宋元版の研究』二八二・二八五ページ。

〔補注〕第二章第2節⑦『康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写』の漢文部分の別の写が天理図書館にあるという(外間みどり「古義堂文庫の琉球関係漢文史料について」(『歴代宝案研究』五、一九九四年))。『歴代宝案』にも収録される。これらについては校正中渡辺美季氏の御教示により知ったため、補注として附記する。

るのは Imperial House Library の誤りですの(ご)に訂正いたします。